



大勢には抗し難く 諸物價續々値下

平地方の理髮料は今日再び 署長に厳諭されて愈よ斷行

時の經濟況に伴はぬ物價の 不合理的なものであること は云ふ迄もなく物の價値は 常に一定のレベルを基調と してたゞる事によつて公平 であるが爲に右に對して

直接間 接の交渉を有

各警察署が値下げ勸告 の第一線に努力されつゝあ るは既報の如く石城地方に 於ては最近植田町が一と 二(そば)及び料理店方面 に

理髮組合なる 團體

は業の刷新改善を圖ること が主眼である之れを或種 の運動に利用することはよ ろしくないと思ひ切つた

藝妓の玉代を 半額

にした白河町あり次へで 島市及び若松市の如きも 理髮料二割以上の値下げを 當とする説多く近く其の具 体化を見る筈であつて平町 もまた過般來(うとん) (そ ば)及び湯銭並に

捕縛に應援逮捕を速かなら ぬに就て十七日小柳 朝一羽百圓餘の鶏の雛九羽 價格三百圓餘を何者かに盗 まれてる事發見直ちに平署 へ届出たが頻々として起る 盜難事件に同署では目下 犯人嚴探中である

集配緩和

平郵便局では例年の如く著 中に於ける郵便集配難を緩 和すべく十六日から九月十 日まで左記の如く減便と共 に正午局出發の市内通常取 集便を三十分早發に更へた

捕賊に表彰

石城郡磐崎村磐城炭礦會社 員皆川二郎、石田芳二、志 賀安の三氏は去る四月一日 同村内に潜伏せる私文書偽 造行使詐欺犯人栗原國太郎 配二號便(同上)

炭鑛稼ぎをやめて 寧ろ安全な生活へ

小田炭礦では過般の出水で 長は暫らく欠員であつたが 事業の縮小を余儀なくされ 新任の金團長は十六日着任 今回坑外雜夫關係四十八名 中署其他關係官公衛を啓訪 を解雇したので一時不穩の 行動あるに傳へられたが職 首された者は日給精々七八 十錢に過ぎず豫ねて他に轉 業を希望しながらも勞銀支 拂の滞滞に悩がれてゐたも ので此際それを全部支拂は れ且つ手當支給等によつて 最高百圓以上を握れる爲め に野菜其他の行商資金に充 分であり業を換へて安全な 生活を立て様とする者多く 従つて何等の不穩もなさそ うである

二百圓の 雜盜まる

に佛人で芭蕉十哲の一各務 支考の高弟盧の坊が杖を遺 めたのを踏んで十五の少女 の身を以て、高田屋に蘆の 坊を訪ふた、 知り合ひの高田屋の亭主 に導かれて、來意を通じた 一麥水かハアアおれの句 は死句ばかりぢや一傲放 な支考風の不通であつた、 「マー、何か書いて見よ」 といふので、千代女は沈吟して 又一句、又退けられた、蘆

女流俳人 千代女(二)

千代女が麥水の門に入つ て句作を勉強すること二年 であつた、享保元年の晩春 であつた、増住の高田屋を 興へられた、

兵籍者の 行方不明 實父から捜査願 平町の杉平二〇居住安積郡 日和田町の日和田字太夫清 水八二生れ伊藤榮(三)は前 記寄留地先から三年前に家 出したるまゝ、音信なく所在 不明のため來る八月二日の 簡閱點呼に不參の止むなき 事情を訴へ實父から平署に 捜査方願出た、

未濟者

本年また二名 平町に於て戸籍法に登錄さ れてゐながら行方不明の爲 め徵兵處分未濟のもの定期 満免除とならぬもの昨年ま で五名の現在であつたが本 中また二名を増加して七名 となつた氏名を上げれば左 記の如くである、

下小川の 火事

十六日の夜 石城郡下小川中島農草野竹 等を取おとしなく所定の檢 査に於て(平)廿三日同上) 神谷、草野、平窪、好田 赤井、植田町役場(植田 山田、錦)廿四日四倉町 役場(四倉、大野、大浦) 廿五日勿來町役場(勿來 川部)湯本町役場(湯本 磐崎、内郷)廿六日小名 濱町役場(小名濱、泉 鹿島、豊間) (江名、豊間)

露店商人 卒倒

平町紺屋町三三露店商清原 長作(五五)は十六日午後九時 十一時頃發火し厩舎一棟を 焼失し、四十分後に鎮火し 損害約五十圓原因は日中 夢焼をした殘火からである

印稅檢査

平稅務署では來る廿一日か ら管内に於ける印紙稅の定 期集合檢査を執行の筈であ るが其日割並に區域は左記 の如く印紙稅の支配を受く 關係者は各種證書、帳簿 等を取おとしなく所定の檢 査に於て(平)廿三日同上) 神谷、草野、平窪、好田 赤井、植田町役場(植田 山田、錦)廿四日四倉町 役場(四倉、大野、大浦) 廿五日勿來町役場(勿來 川部)湯本町役場(湯本 磐崎、内郷)廿六日小名 濱町役場(小名濱、泉 鹿島、豊間) (江名、豊間)

卒倒

千代女は作句に熱烈な思 想を呼んで筆硯を前にした 蘆の坊は大いびきで眠り 初めた、半時程して一句を これや歌目ぢや 千代女の頭から手足は效 果である、夜は更けて三更 過ぎ、二十句、三十句、 蘆の坊は蚊帳の中で目を 覺して、

平稅務署の 來る廿一日か ら廿六日まで

終る者の 終り (五) 島山庄

自分は直ぐ歸らうと思つ た、と、その時、俄然、樂屋 へ飛込んで來た男があつた 折も折、一席得意の快辯 を揮つて引上げて來たAと その男とが、樂屋裏の薄暗 い電燈の下でパツタリ出遇 つた、 誰だ！吃驚するぢやない か、氣をつけ玉へ、 Aは驚きつゝも、例によ つて強いふり、豪らそうな 振りの威權を見すべくその 男をキメつけた、 飛込んで來た男は肩を硬 直にして靜かに顔をもちた げ、意外にもそれはCであ つた、自分は思はずドツキ とした、 A君、彼のこの一言は低 かつたけれど、力がこも つた、それは、Aは何 所までも大きい振に、云ふ ことは、それは、Aは、電 光の如く流れた一脈の殺 氣、 Aは思はず後にダヂら ない、自分は夢中で、C君 だ、いや、いや、その言葉の終ら ない更に其瞬間、馬鹿ッ！ 假面をかぶる者への天誅で あるッ！と、 Aは、一喝、Aは、彈丸 の標に、白刃一閃、Aは鮮 血にまみれてそこに倒され た、倒るもの、終り、當然 終るもの、終りである(完)

千代女は作句に熱烈な思 想を呼んで筆硯を前にした 蘆の坊は大いびきで眠り 初めた、半時程して一句を これや歌目ぢや 千代女の頭から手足は效 果である、夜は更けて三更 過ぎ、二十句、三十句、 蘆の坊は蚊帳の中で目を 覺して、

改革論(空)

第五章 絶対的 繼續主義 責任分 担主義 單位主義

且つ十一年のうちには中等學校時代も含んで居るのでありますから、結局其一千六百五十人を教育するに少くも百人近くの教員が關係してゐることになるだらうと思はれます、而して其責任は誰が負ふかとなる、其百人近くの教員の共同責任となるのであります。私は之に責任共担主義と命名するのであります、責任共担主義は結局無責任となるのであります、今日のバラツク式教育は責任共担主義乃至無責任主義となり教育の不徹底となつて居ります、故に今日の教育に對する批難は決して教育者のみをせむることは出来ないものであります、欠陥ある教育學理の適用と、我國の教育の歴史的基礎とを無視したバラツク式教育制度が大に災をなして居るのであります。

次に尙今少しこの絕對的繼續とせき任分担主義のもたらす結果について申上げて見やうと思ひます、國民學校の教育を受けた學兒の方から觀察して見ますに、かりに不幸にして両親に死別するが片親を失つてよくない繼父母の手にかゝつたとしても在學中も卒業後も、教父母があつて不幸な家庭を善導してくれは勿論自分に對して親身になつて同情もし愛撫もしてくれ、一生生涯の親同様に力になつてくれるといふ事を考へた時にどんなにか方強く感ずることだらうと思ふのであります。



平田町 電話三五二二

サロンの献立

いつも生ビールがごいさす
キレイな座席で氣もちよく
フランス料理の献立

夏帽の御用店

買ひ 良き店

一文字帽子
バナマ帽子
麦帽子
ピツケ帽子
オーガンデ

「その他」
實用品や
流行品を種々
豊富に取揃へました

モリタヤ
電話三五三番

本の 冷 藏 器 丸

製造元

平町 電話三五九番



一般科

川井科診療所

警城平町南町六五
電話七二二二番

女醫 川井安子

看護 急病の来め
に應じます

平看護婦會
電話二〇七番

大角園 特約

安いからこて
品はわらて
ません
良いか、悪いか
試してごらん
小笠銘茶

總てお徳用向

市價 三割安

壽仙二〇錢
福壽一八錢
焙茶拾五錢
番茶拾五錢
川柳拾二錢

何れも四半斤袋入
正味四十日

瓶詰和洋
酒、罐詰
雜貨、洋
菓子類

店商谷半

(隣院病松若)町大町平

價之低々
質之高々

良品廉價店

平町 電話三五九番

スペイン G.H.N 元 詰
甘味葡萄酒
ゴルフポートワイン
Y 1.10

御婦人の方には少し水を加へて
召し上ると風味一そう佳良です

(電話) 西村屋薬舗 (三番)

夏物浴衣地特賣

伊伊伊

入院應需

藤沼醫院

平町 電話七〇五番

夏物特價品提供

婦人洋傘 一圓
カクニ石鹸半打 六拾錢
石鹸半打 五拾錢
ツルヤ特撰 五拾錢

精幸堂時計店

時計と修理の御用命は
平町土橋通り
セイコー

示時正確 大々的勉強

野崎自動車商會

平町 電話六五九番

是非御試乗
御用命を願ひます

貸切専用の
スマートな自動車が参りました
親切、迅速、安全をモットー
とし低廉な料金にて奉仕いた
します

諸毒下シの大妙薬

安流丸

平町 電話三五九番

夏物特價品提供

大人縮シヤツ武校 四拾錢
短芥下參足 參拾錢
同ツルヤ特撰電足 五拾錢
タリヤス袋又縮校 參拾錢

總レ一スベツテ 六拾五錢
その他
賣切れぬ内お早く御買求め下さ
る様願ひます